科学者委員会　学術体制分科会
論文査読の意義及び課題に関する検討小委員会　第７回　議事要旨

開催日時：2023 年６月 27 日（火）18:00-20:00
開催場所：オンライン会議
出席者：佐々木 裕之、小林 傳司、松井 三枝、和田 肇、大場 みち子、中村 征樹、田中 智之、堀 利栄（敬称略）
欠席者：小長谷 有紀、山本 晴子（敬称略）

１）前回議事要旨の確認と確定

２）アンケート結果の報告と意見交換
資料２に基づいて、アンケート結果が報告され、意見交換が行われた。
主な内容は以下のとおり。
・査読の重要性と限界が見えてきた結果だと思う。ピアレビュー制度よりも良い制度が今のところあまりないということか。
・ダブルブラインドの方が望ましいという結果だが、記載内容等で論文著者の盲検性が割れることも多い。この点についてはどうか　→同じ雑誌（ライフサイエンス系）の中でダブルブラインドとシングルブラインドの査読結果を比較した研究があったが、シングルブラインドの方が、先進国や英語圏の研究の採択率が上がるという調査結果だった。ダブルブラインドの方が査読の公平性が保たれる可能性はある。
・「査読のあり方には領域間で相違があるが、人事評価基準は一律」の意味はなにか。
　→人事評価基準に論文数が入っている場合、領域間で査読や論文採択の在り方等が異なるのに、一律に論文数で、横並びで評価されることを意図されていると思われる。
・査読者の推薦制度を悪用する人が一定数いると思うが、この制度に肯定的意見が比較的多かったのは、査読者の枯渇や専門分野の細分化等を経験しているためか。
　→生物・農学・化学など自然科学分野で否定的意見が少ない（数%台）。人文学や社会学では 20%以上の否定的意見があるが、これらの分野ではあまり査読者推薦制度が取り入れられていないのではないか。
・査読教育について、所属機関への期待が少ない。
　→個別意見でも、所属機関で一律に教育すると概論に留まるため、分野毎、雑誌毎に査読基準を示す方が良いという意見が多い。
・アンケート結果に回答案に載せるべき不適切事例についての意見はあったか。
　→回答案に示す類型から大きく外れるものはなかった。不適切さのレベルは人によって様々だった。

・アンケート結果では、研究不正などの検出や研究に介入するような助言等は査読の重要な役割とはみなされないようである。

３）回答案について

資料３に基づいて、回答案について説明がなされた。

・査読不正に至った背景（論文至上主義など）について書き込むべきではないか。

・教育に関して、教育のタイミングは重要だが、どこが教育を施す主体として責任を持つべきかという点も重要。

・少子化等の影響で学協会の会員数が減っていて、これまでと同じように雑誌の出版や教育活動等に対応できるか将来的に問題。複数の学協会が合併する、雑誌を統合するなどした上で、雑誌の掲載方針や査読者教育などを充実させる方向性が良いのではないか。

・査読教育を研究室任せにするのは良くないだろう。

・ライフサイエンス系の雑誌で、査読者と研究者のやり取りが公開されているものがあり、それは大学院生等にとって大変良い教材である。大学で「研究評価」として大学院生を教育するということも考えられる。

・女性研究者に対するセミナーの一環で、査読に関するセミナーを大学院生向けに行っている。大学院生に対する教科として行うと負担が大きいので、出版社や学協会が作成した教育コンテンツを提供する場を大学が設ける方向が良いのではないか。

・英国では研究者が身につけるべき素養(Researcher Development Framework)を整理して、大学院生等に義務付けるような仕組みを動かしている。日本の大学院教育にこのようなものを組み入れるのがいいのかもしれない。

４）その他

・今後のスケジュールが確認された。

・今週中各委員が回答案に対する意見を提出。7 月中旬までに最終案を上位分科会に提出する。今後の対応は委員長一任とし、必要に応じてメールによる意見交換等を行う。

資料：資料１　第6回議事要旨案

資料２　20230627アンケート報告

資料３　回答案（論文査読）_0627

参考資料１　アンケート結果（全体集計結果230627）

参考資料２　230523【更新】スケジュール表（論文査読）

以上